

ことばの教室で子どもたちが話してくれたこと

—自分の問題を外在化する取り組みの中で—

宇都宮市立陽東小学校 高木 浩明

今春異動した学校のことばの教室で、どもる子どもたち8名（継続6名、新規2名）との出会いがありました。ここでは、その中の6人の子どもたちと行った取り組み、自分が苦手とすることや、自分の生活に影響を与えている問題、不安に感じていることに名前を付けて、それをテーマに話し合う中で、子どもたちがどんなことばや思いを伝えてきたか、まとめていきます。

1 A君と「STOP君」

①しんどい体験

4月からことばの教室に通い始めたA君は、小学校2年生の男子。家族や友だちと活発に会話し、ことばの教室でもこちらの問い掛けにはきはき答える姿が見られます。その彼が、強い苦手意識を持っているのが、発表場面です。

彼には、しんどい体験がありました。1年生の2学期、彼のクラスでは日直当番の児童が朝の会で1分間スピーチをする活動が始まりました。A君にとっては、好きな食べ物や遊び、将来の夢といったテーマについて、話す内容を考えることは、それほど難しいことではありません。ところが、自分がスピーチしようと、クラスみんなの前に立った途端、声が出なくなったのです。何とか話そうと、深呼吸したりする。けれど、いざ話そうとすると声が出ない。これまでも、ちょっとことばが出ないことはあったけれど、ここまで話せなくなるのは初めてです。冷や汗がでてきました。恥ずかしい気持ちでいっぱいです。

とうとうその日は話せませんでした。そして次の日、再挑戦しようということになりました。彼は家に帰って、何度も練習しました。その時は、ちょっとどもることはあっても、話せなくなることはありません。けれども、翌日の朝、また同じ状態になりました。彼自身が諦めたくない、そんな気持ちを先生に伝えたこともあり、さらに翌日、今度は作文を読む方法でリトライします。それでも、上手くいきません。

その数日の間も、友だちや先生とあいさつしたり、おしゃべりしたりはできました。算数の授業で、答えも言えました。けれど、このスピーチだけが上手くいかない。そして、そうまで辛い思いをして1分間スピーチをする必要があるのか、そんな本人や保護者の思いもあり、この時だけでなく、それ以後もこの1分間スピーチにはトライしませんでした。ただ、彼の中には、発表することに対する恐怖心と、強い苦手意識が残りました。

②ことばの教室で

2年生になり、彼にとって新たな状況、ことばの教室への通級が始まりました。そして、ことばの教室担当者から、吃音は100年以上の研究の歴史があるけれど原因も治す方法も分かっていない。けれど大昔から今に至るまで世界中に100人に1人はどもる人がいて、その人たちがどもりと共にしっかり人生を生きてきた歴史もある。結婚したり、本当に様々な仕事に就いている。このことばの教室で、どもりを治すことは出来ないけれど、あなたが吃音とともに豊かに生きていくためにどうしたらいいか、一緒に考えることは出来る。こんな話を聞きました。

この最初の出会いの場について、彼はこんな話をしてくれました。「いきなり『どもる』ということばだったり、『ここでは治せない』という話だったり、本当にびっくりした。もちろんそう言われても治したい気持ちは変わらないけれど、吃ることは悪いことではない。どもるのは自分だけじゃない。どもる大人の人がいることを知ったので、ちょっと安心した」彼は、こうした吃音についての学習の中で、どもりを治したい。治さないと駄目だという気持ちが、ちょっとずつほぐれていったようです。そして2ヶ月ほど、通級した頃には、「どもる自分とどもらない自分がある。今まではそのどもる自分を何とかしようと思っていたけれど、まわりをどもっても大丈夫にすればいい。みんなが、僕がどもっても平気になってくれたらいい。僕がどもっても大丈夫になりたい」そんな思いが出

てきました。

もちろん、日常の生活の中では、どもらずに発表したいという思いと、どもるかもしれないという不安が強くあり、授業中自分から手を挙げてとは、容易になりません。それでも、クラスの中では音読や発表する場面に時々遭遇します。そのたびに、「今日はどもらなかったから上手くいった」「今日はだめだった」、そんなふうに振り返っていました。

③どもる方がOK

6月に入り、国語の授業では、「お手紙」というこれまで以上に長い物語文が教材になりました。そしてある日、1人ずつ、一行ずつ音読することになりました。1回目はOK。2回目もOK。すると彼の中の、ドキドキはさらに強くなっていきます。3回目、今度はどもりました。すると「あ～あ。イヤだなあ」という気持ちと共に、「どもったけど伝わってよかった。次も何とか大丈夫かなあ」と言う考えが浮かんできました。これは、彼にとって新しい経験でした。一文ずつという短いけれども何回も音読するという課題の中では、どもらないことがよかった、ホッとしたという気持ちと一緒に、次の時への不安を大きくし、どもったことが、何とかかなりそうという安心感を生じさせたのです。どもる方がOKになったのです。

その翌週、前回のことばの教室でのやりとりを振り返っていると、さらに意外な彼の思いが出てきました。それは、実は1年生の時の一分間スピーチのことで、その時は、発表をしなくていいとなりホッとした、助かった、よかったと思ったけど、今考えるとやっぱり気が済まない。僕は発表したいと思っている。1年生の時はどもってダメージを受けたけれど、でも今の自分は、そこから立ち上がろうとする人になって、どもったとしても、読み続けて、読み切った頑張る人になりたい。そんな、彼の思いが次々に出てきます。

④STOP君

そこで「そんなあなたを、発表させなくさせるのは何だろう？」という質問をしました。彼の最初の答えは「どもり君」でした。そして「僕が話そうとするとこいつが出てきて、僕をどもらせて話させなくされる」「悪いやつ」と、説明しました。それが、さらに話を進めていくと「どもり君が出てくると、話せなくなると思ったけど、こいつのせいだとすると、休み時間や、家や、ことばの教室でもしゃべれなくなるはず。だけど、そうはならない。だから、どうやらこいつではない」となり、次に彼が考えたのは「STOP君」でした。そして「ぼくをどもらせるのは、STOP君のしわざです」と、悪魔のSTOP君(図1)を描きました。

「こいつが出てくると、手を挙げたり、発表できなくさせる」「でも、みんなの前で、苦しい思いをしないようにもしてくれる。最初は悪魔とか凄くマイナスのイメージだったけど、どうもそれだけじゃないみたい」そんな話をしながら彼が描いてくれたのが図2のSTOP君です。そして、このSTOP君の性格や、攻撃、出てきた結果や攻撃のパターン、さらには弱点を、一緒に話ながら絵のまわりに書き込んでいきました。その中には「前に発表しようとして、どもってできなかったから、僕は発表が怖くなった。その時のことを、記憶を持ってきて見させるから、僕は不安になって、発表できなくなる」「けれど、ぼくがうんと発表したくなると、こいつは弱くなる」そんな彼のストーリーが、しっかり書かれていました。

そんな彼が、夏休み前の最後のことばの教室の時間に教えてくれたのが次のような話です。「この前、授業参観があつて、町探検に行った時のことを発表した。結構長く話さなきゃならなくて、時々どもったけど、でも大丈夫だった。最近、STOP君は弱くなった。うーん、そうじゃなくて、僕が強くなった。この頃、何回も発表をやって、どもることもあったからかもしれない。だけど、まだ発表する時は緊張する。STOP君じゃないし、どうしてそうなるのか、何だか分からなくなった」彼とSTOP君の話は、まだまだ続いていきそうです。そして、その場に同行していくことに、私自身わくわくしています。



図1 悪魔のSTOP君

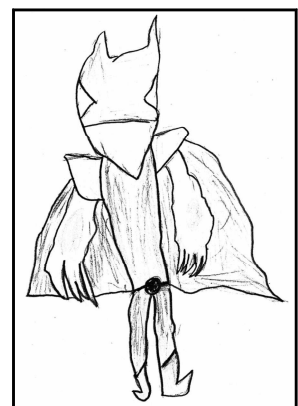


図2 新STOP君

2 B君と「早口べんけい」

B君も、4月から通級を始めた2年生・男子です。生活科の学習で町探検に行き、お店の人に質問することになりました。その練習場面で、自信がない、緊張するから早口、小さな声になったこと。これはダメだと知っているけど、早く終わると「あー終わった、助かった」となったことなど、話してくれました。

この緊張すると出てきて、自分を早口にさせるものを、彼は「早口べんけい」と名付けました。そして、自分ではしたくないのに、早口、小さな声にさせる。家ではちょっとだけど、学校では発表とかあるとよく出てくる。こいつが出てきてもどもりは変わらないけど、小さな声だから目立たなくさせる。早口で言っていると、焦ったように見える。それは、僕をどもった人ではなく、焦った人に変えてくれる。ごまかせちゃったりする。

さらに、それまではどもりのことは気にしないと話していたB君が、どもるのは悪いことではないと思うけど、へんなこと、不思議なことだと思う。だから、友だちから何か言われたわけではないけど、へんと思われるのがいや、どもって話すことがきらいと、思いを伝え始めました。そう話しながら、彼の描いたキャラクターは、かなり強力な感じになりました。

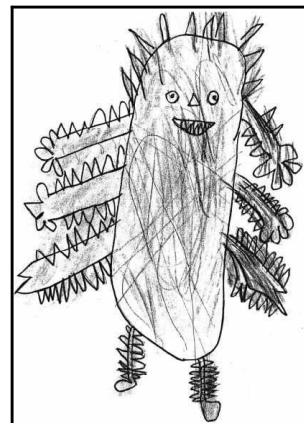


図3 早口べんけい

3 C君：「やめさせ君」と「すごまん」

C君は昨年から通級を始めた校内の2年生です。彼は、しゃべりたい、相手に分かってほしいけど、やめちゃう。そんなふうに自分を、止めるものが、いる感じがする。たぶん、恥ずかしい気持ちから、勇気がなくなる、言いたいけど言えなくなる気がする。そんな話をしながら、「はずかし君」というキャラクターを考えました。

翌週、さらに話を進めていくと、僕の手を挙げるのをこいつはやめさせちゃう。おなかの中で飛んでいて、おなかをちくちくさせる。算数の時間によく出て、僕にくっついた瞬間、すぐに手を下させる。だから、「やめさせ君」だ。だけど、10回に1回ぐらいは、本当に答えが間違っていて、みんなの前で間違えると嫌な感じがするけど、そうならないようにしてくれる。だから、嫌いだけど少し好き。感想を言う時とか、手を挙げる人が少ない時とか、出てきても大丈夫な時があることも教えてくれました。

実はここまでの話では、どもることはこの「やめさせ君」とは、関係ないと彼は言っていました。そしてこの「やめさせ君」は、1年生のころより、2年生になって増えた。自信のない、短い答えの時によく出てくる。じゃあ長い答えの時には？と質問すると、ちょっと考えたあと、長い答えの時には、実はどもるのが関係する。実は2人いて、もう一人は「すごまん」こいつは、ぼくをたまに飛んできて、やめさせ君と一緒にやめさせようとする。二人が一緒になると強力になる。そんなに出てこないけど、出てきたら「やめたい」が強い気持ちになって、しなくなっちゃう。

この二人いるという発想は、「休み時間よりも、授業中の方が先生もいるからどもっても大丈夫」と言いつつ、彼の中には「やっぱりどもってのは、いけないんじゃないか」「友だちは、どもりのことを知らない。だけど、僕自身はまだ、そのことをうまく説明できない」といった不安感がまだまだ根強くあることを、示しているように感じます。

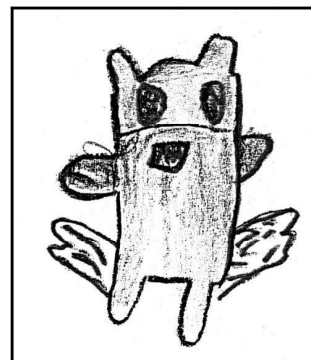
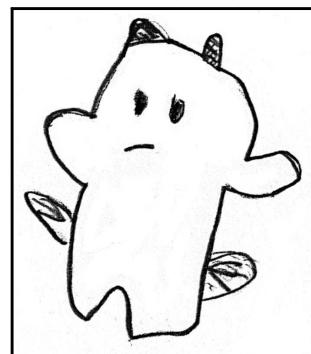


図4 やめさせ君とすごまん

4 元同級生のD君とE君

D君とE君は一緒にことばの教室の学習を進めている、3年生の男子。昨年まで同じクラスだったこともあり、ことばの教室で見られる二人のやり取りは活発です。

D君は、今は大丈夫だけど、将来が不安だからと自分の課題を「ふあん君」と名付けました。彼にとっては、吃音の波もあり、今できていることがずっとできるか分からない。そして、僕は吃音の影響をなくしたい。吃音の不安を0にしたいと話していました。この様子を見ていたE君は、自分は吃音の影響を受けることがこれまでにあったし、これからはあると思う。だけど、それでもやっつい

ける。不安が0にならなくてもいいと思っていると言い始めました。

このやり取りはD君にとって、ちょっと意外なものでした。けれども、自分がどもっても大丈夫と思ったのは、3年生になってから。それまでは治せると思っていたし、今よりどもらなくなると考えていた。だから、きっとどもっても大丈夫と思いたいけど、今はまだ不安なんだと思う。でも、いろんなことを頭に浮かべると、安心の時もある。将来は僕にとって不安と安心の両方だとし、新しい名前「ふあんしん君」を考えました。この名前の付け直しを言い始めた彼の様子から、意識の変化が感じられました。

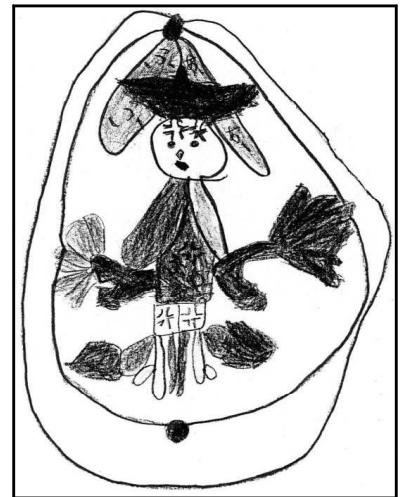


図5 ふあんしん君

一方でE君は、昨年、積極的に手を挙げて発言するD君の様子を見ながら、自分はそんなふうにはできない。手を挙げようと思うけどストップする。そうしよう自分にそっと言うものがあるとして、「ささやき やめちゃえちゃん」を考えました。そして、いつもではないけど手を挙げる、挙げようとする出てきて「挙げるの止めよう」と言ってくる。これが何回か続くと、おこったバージョン（「はっぴょう やめちゃえ君」）に変身すると、話を続けました。

その時、D君、E君と私の3人の中でふとわき上がった疑問は、何で発表しないことが続くと変身するの？力が強くなるの？ということでした。そして、あーでもない、こーでもないというおしゃべりの中から見えてきたのは、実はE君はとっても話したい、手を挙げたい、発表したいと思っていること。だから発表しないことが続くと、E君の中では、その気持ちがどんどん強くなる。発表とか苦手で出来ていないけど、しなくていいとは思っていないし、したいと強く思っている。そのE君の気持ちを押しさせるには、この「やめちゃえ」もバージョンアップしないと、E君を抑えられない。そんな関係が、少しずつ見えてきました。

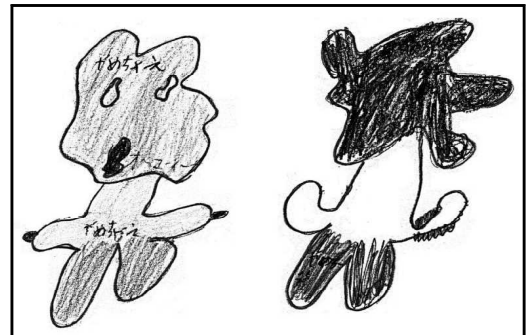


図6 ささやき やめちゃちゃん(左)と
はっぴょう やめちゃえ君(右)

この「実は自分は話したい人だ」という発見は、E君にかなり強い影響を与え、この一連の学習の後、教室の中で彼が発言する姿は明らかに増え、担任の先生からも、最近の彼の変化にびっくりしたという連絡がありました。

5 F君の外在化

F君は6年生の男子、4年生の頃は吃音のことをばかにされたり、何人かのクラスメートから意地悪を受けた経験があり、「その頃の不安は98レベルだった。だけど、5年生になってクラス替えがあつて友だちも変わったから今は5ぐらいなつた」と話してくれました。

そんな彼にとって、今一番気になることは「目立ちたくない」という気持ちで、それが無いようにしたい、消したいと思っていました。その一方で、こいつは、自分がどもりたくないと感じる場面があると、「ここはどもるといけないから、しない方がいいよ」と僕を守るように働くこともあるとして、それに「はずかしくん」というネーミングをしました。

さらに、「僕にはそれ以外にも、いろいろなのがいる」とし、「はずかし」「元気」「おくびょう・こわがり」「いじめ」「いかり」と5つのキャラクターを考えました。そして「出てくる回数は、はずかしが一番多くて、おくびょう、いじめ、いかりの順番で少なくなる。元気はいつでも、ぼんやりしている感じ」「力の強さに差があつて、はずかし、元気、おくびょう、いじめ、いかりの順に弱くなる」ことや、「いかりは僕が変身して、外に向かう感じ。それ以外は自分の内側に向かっている」「その中でも、はずかしはどもった直後に、時々現れる」といった感じで、自分の生活に影響を与える（吃音の）問題を捉えていきました。

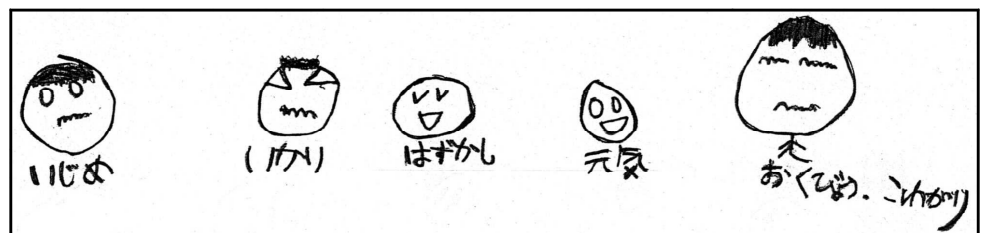


図7 F君の考えたキャラクターたち